



Title	最初期ウパニシャッド文献の成立と伝承： Jaimitya-Upanisad-Brāhmaṇa研究序説
Author(s)	藤井, 正人
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1989, 23, p. 13-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12573
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

最初期ウパニシャッド文献の成立と伝承

—Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 研究序説—¹⁾

藤井正人

0. ヴェーダ文献を、その成立と伝承にかかわる学派 (*śākhā*) の観点から歴史的および地理的に研究することは、近年のヴェーダ学における新しい学問方向である。なかでもヴェーダ諸学派の分布と移動を各時代にわたって跡づける M. Witzel の研究²⁾は、ヴェーダ学の新たな地平をひらくものとして学界の注目を集めている。この研究方向は学派の展開に対してだけでなく、各学派に属する文献それ自体の成立と伝承の解明にも有効である。学派的色彩が比較的薄いウパニシャッド文献に関しても、学派の視点を研究に導入することによって、ウパニシャッドを独立の文献群としてひとまとめに扱う従来のスタティックな方向から、学派の伝統と学派間の影響関係のもとでウパニシャッドが成立していく過程そのものを解明するダイナミックな方向へと研究を転換させることが可能になる。本稿は、この研究方向にそって、サーマ・ヴェーダ系のジャイミニーヤ派が伝える最初期ウパニシャッド文献 Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa (=JUB) の背景にある学派の伝統を考察して、この文献の成立過程を、ヴェーダ後期に各学派に共通して起こったアーラニヤカ・ウパニシャッド文献成立の動きとの関連のもとに解明し、さらに学派におけるこの文献のその後の伝承を跡づけることを目的としている。

1. 学派の伝統 サーマ・ヴェーダ系の学派にはカウトゥマ／ラーナー

ヤニーヤ派と、シャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派の二つの系統がある³⁾。JUB は後者に属するアーラニヤカもしくは最初期ウパニシャッドであり、それに対応する前者の文献は有名な Chāndogya-Upaniṣad (= ChU) である。ChU の最初の 4 章と JUB には多くの parallel passages があり、この部分に関する限り両者が一種の異本の観を呈していることは、かつて L. Renou が指摘したところである⁴⁾。ところが両文献を詳しく調べると、ChU のこの箇所が JUB に遅れて成立し、それを前提にしていること⁵⁾、しかもそれにもかかわらず内容上、根本的に相違していることがわかる。歌詠祭官が伝えるサーマ・ヴェーダ所属の文献として、JUB はほとんど終始、gāyatra という名のサーマン(旋律)，特にそれの aśarīra-gāyatra と呼ばれる特殊な歌い方⁶⁾を中心に思弁を展開している⁷⁾。それに対して、ChU は gāyatra を主題に特定することもなく、aśarīra-gāyatra については言及すらしていない。言ってみれば、カウトゥマ／ラーナーヤニーヤ派は自分たちのアーラニヤカ・ウパニシャッド文献を作る際に、模範としたシャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派の作品の主要テーマを意図的に捨て去ったのである。この重大な改変は両文献の成立の時代の違いとともに、背景にあるサーマンの伝統の違いにもその原因を見い出すことができる。一般にヴェーダ学生がヴェーダを学習するときに、各テキスト対して特定のヴラタ (vrata 誓戒) を守るべきことがグリヒヤ・ストラに規定されている。サーマ・ヴェーダ系のグリヒヤ・ストラもサーマンの学習に関して一定のヴラタを定め、おのおののヴラタに対応するサーマンはサーマ・ヴェーダ・サンヒターの Gāna と称される部分に列挙されている。こうしたヴラタの一つとして aupaniṣada-vrata と称されるものがサーマ・ヴェーダ各派のグリヒヤ・ストラに規定されている⁸⁾。カウトゥマ／ラーナーヤニーヤ派は、奇妙なことに、このヴラタに対してはサーマンを伝えていないが、シャーティヤーヤナ／ジャイミニ

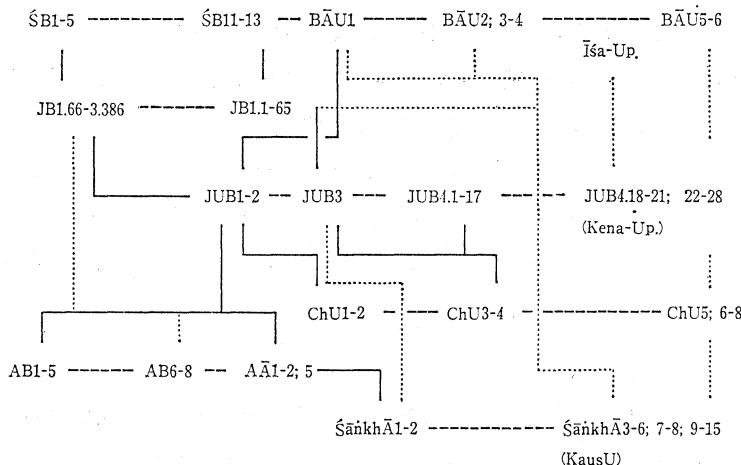
ーヤ派はそのヴラタに対応する19のサーマンを *Āranyakā-Gāna* の最後にあげ、上述の *gāyatra* を最終のサーマンとしている⁹⁾。この事実は、シャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派が *gāyatra* を、最後に学ぶべき最高のサーマンとして極めて重要視していたことを示唆している。ヴェーダ後期のアーラニヤカ文献制作の動きの中で、シャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派がサーマ・ヴェーダのアーラニヤカを作ろうとしたときに、サーマンの中でも特に *gāyatra* を中心のテーマに選んだのはそのためである。この新しい動きが、同じくサーマ・ヴェーダに所属するカウトゥマ／ラーナーヤニーヤ派に影響を与え、同様の文献を作らせることになった。しかし、その際、サーマンの伝統の違いから、彼らが本来の *gāyatra* に対する思弁をサーマン一般に対する思弁に巧みに作りかえたことは、例えば JUB と ChU の冒頭の聖音 *om* に関する議論の違いに端的に示されている¹⁰⁾。

2. 成立過程 JUB は、本来それぞれ独立のテキストであったと思われる 1.1-3.42, 4.1-17, 4.18-28 の三部分からできている。最初の部分は内容からさらに 1.1-2.15 と 3.1-42 の二層に分かれ、最後の部分も 4.18-21 (=Kena-Upaniṣad) と 4.22-28 に区分される。JUB と他の文献の parallel passages を広範に調査し、各文献の部分ごとの対応関係を解明することによって、JUB の成立過程と他の文献との関係を、かなりの程度、正確に復元することが可能である。この方法で得られた結果をまとめ、図に示すと次のようになる。（印刷の都合上、図を説明文の5)と6)の間に入れた。時間の流れを左から右の横軸にとり、関係の濃度を実線と点線で区別した。)

1) JUB の最初の 2 章には *Jaiminīya-Brāhmaṇa* (=JB) 1.66 以後、特にアグニシュトーマ部分 (1.66-364) からの借用が多い¹¹⁾。JB のア

グニホートラ部分 (1.1-65) の成立が JUB の最初の 2 章に遅れる可能性がある。JB のこの箇所との結び付きが JUB 第三章をそれ以前の章から区別する特徴であるから¹²⁾。

- 2) ChU の最初の 2 章と Br̥hadāraṇyaka-Upaniṣad (=BĀU) の第一章は、JUB の最初の 2 章と関係し、成立は JUB に遅れる¹³⁾。ChU はこれ以降も JUB と関係するが、BĀU は第二章以降 JUB との文献上の関係は示さない。
- 3) シャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派が JUB の最初の 3 章を作る時に、リグ・ヴェーダ系のアイタレーヤ派から著しい影響を受けている¹⁴⁾。カウシータキ派とは、後代の密接な関係にもかかわらず、JUB の最初の 2 章の段階では特別な関係は認められない¹⁵⁾。
- 4) JUB 第三章は前の 2 章を踏まえて新しい発達した思弁を展開している¹⁶⁾。この箇所には、JB 1.1-65 のアグニホートラと葬送儀式に関する思弁とのつながりが見られる¹⁷⁾。
- 5) ChU の第三、四章は JUB 4.1-17 のあとに作られたものである¹⁸⁾。



- 6) JUB 4.18-21 (=Kena-Upaniṣad) は最古の韻文ウパニシャッドの一つであり（ただし後半は散文），Īśa-Upaniṣad と類似の詩句を含んでいて成立は早くとも BĀU 第四章以後である。
- 7) JUB の残りの部分 (4.22-28) は内容上，BĀU の最後の 2 章，ChU の第五章，ŚāṅkhĀ の第九章以降に対応していて，プラーナに関する断片的な思弁 (22-24)，日常生活の心得についての教え (25-26) 等を含んでいる¹⁹⁾。

ここで注目すべきは，これらの文献が部分ごとに相互に関係をもちながら，長期間にわたって平行して発達していったことである。したがって各文献の部分ごとの対応関係を調べることは，それによってそれぞれの時代における学派間の関係を類推することができるため，文献の成立過程を学派の歴史と学派間の地理的な関係において理解する糸口となる。この点で興味深い事実は，JUB 成立過程におけるシャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派とリグ・ヴェーダ系の学派との関係である。Witzel の研究によれば，シャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派はもと北インドのクル・パンチャーラ地方にいたが，後に南下して西インド，ヴィンディヤ山脈の北の地域に移住したようである。リグ・ヴェーダ系のアイタレーヤ派ははじめ北インドのクル地方にいたが，プラーフマナ後期に東インドへ移動し，カウシータキ派は中央から西インドにかけてひろがっていたという²⁰⁾。JUB がはじめアレタレーヤ派との関係のみを示し，第三章ではじめてカウシータキ派との接触を見せることから，シャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派が関係するリグ・ヴェーダ系学派が——彼ら自身の南下によってか，あるいはアイタレーヤ派の東遷によってか——JUB の第三章成立の頃にアイタレーヤ派からカウシータキ派にかわったことが推測される²¹⁾。

3. テキストの伝承 シャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派のテキスト伝承の中で、JUB の Kena-Upaniṣad 部分 (4.18-21) は独立に扱われたようである。現在においてもタミル・ナードゥ州のジャイミニーヤ派バラモンたちは、JUB の口頭伝承を完全に失っているにもかかわらず、Kena-Upaniṣad だけは暗唱している（筆者自身の取材による）。後代、ヴェーダーンタの学匠たちが JUB のこの部分を真正のウパニシャッドと認めて、学派の伝統から切り離して尊重することとなった。しかしながら、初期のヴェーダーンタ学匠はウパニシャッドが本来属していた学派の伝統についてかなり正確な知識を持っていたようである。この点で、シャンカラ（8世紀）の Kena-Upaniṣad に対する注釈は、当時における JUB の伝承状況について貴重な情報を与えてくれる。彼は注釈を始めるにあたって、このウパニシャッドがあるテキストの第九章 (*adhyāya*) の冒頭部であることを教えている。現行の JUB の版では Kena-Upaniṣad は第九章の冒頭部ではなく第四章 (*adhyāya*) の第十節 (*anuvāka*) 全体であるにもかかわらず、シャンカラが述べている Kena-Upaniṣad を含むテキストは JUB であると理解されてきたようである²²⁾。しかしシャンカラが言及しているのは *Jaiminiya-Brāhmaṇa*, *Jaiminiya-Ārṣeya-Brāhmaṇa*, *Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa* を含むジャイミニーヤ派のプラーフマナ全体であると考えることも可能であるし、またその方がシャンカラが続いて述べるそのテキストの内容に合致している。彼によれば、そのテキストは Kena-Upaniṣad に先立つ部分で、すべての祭式行為 (*karmāṇi*) と、プラーナとサーマンの念想 (*upāsanāni*) と、*gāyatra-sāman* に関する哲学 (*darśana*) を説いている²³⁾。Jaiminiya-Brāhmaṇa のパローダ写本の奥付には、ジャイミニーヤ派のプラーフマナの全8課の名が列挙されていて、そのうちの最初の6課が *Jaiminiya-Brāhmaṇa*, 第七課が *Jaiminiya-Ārṣeya-Brāhmaṇa*, 第八課が *Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa* に相当

している²⁴⁾。もしシャンカラの述べるテキストの章分けがこれに類するものであれば、JUB の Kena-Upaniṣad を含む最後の部分が独立に扱われて、第九課を構成することも十分にあり得ることである。Kena-Upaniṣad とそれ以前の部分の間にはっきりとした区別をたてるべきことは、このほか、やはり同じシャンカラとラーマースジャの Brahmasūtra の両注釈の中でも言明されている²⁵⁾。一方、Kena-Upaniṣad 以前の二つの部分 1.1-3.42 と 4.1-17 についても、独立に伝承された二つのテキストであったことは、それぞれ別個の *vamśa*（教義伝承の系譜）をもって終わっていることに示されている。これに関連して興味深いのは、ジャイミニーヤ派学匠バヴァトラータ（1千年紀後半）が Jaiminiya-Śrautasūtra の注釈の中で JUB 1.20-24 (1.6-7) を「前ガーヤトラ・ウパニシャッド (*pūrvā gāyatropaniṣad*)」の第六、七節」と呼んでいることである²⁶⁾。「前 (*pūrva*)」という表現から、前後二篇のガーヤトラ・ウパニシャッドが彼に知られていたことがわかる。それらが 1.1-3.42 と 4.1-17 であったことは間違いないであろう。以上のように、JUB の三つの部分はその当時、依然それぞれ独立したテキストとして扱っていたことが推測される。これらの三つのテキストが Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa の名のもとに单一の作品と見なされるようになったのはいつの頃か明らかではないが、どの系統の写本も等しくこれら三部分を一つの写本の中にひと続きに記録していることから、ジャイミニーヤ派の伝統がタミル・ナードゥとケーララに完全に分かれてしまう以前のことであろう²⁷⁾。

前述のサーマ・ヴェーダ学生に課せられるヴラタは、本来はサーマンの学習に対して規定されたものであるが、他のヴェーダのヴラタにおけると同様に²⁸⁾、後代の確立した学習カリキュラムにあっては、サーマンだけではなく祭式書や哲学書などの学習もヴラタに割り当てられたと思われる。また、JUB の主要テーマである *aśarira-gāyatra* と呼ばれる特殊なサーマ

ンは、サーマ・ヴェーダ・サンヒターには収録されておらず、JUB にだけ記録されている²⁹⁾。シャーティヤーヤナ／ジャイミニーヤ派の学生が *aupaniṣada-vrata* のもとで最後に学ぶのはこの特別な *gāyatra* であったと考えられるので、JUB はこのヴラタの期間に教えられる教科書として受け継がれてきたのかもしれない。JUB のテキストそのものは比較的良好に伝承されて、現在でもケーララ州のジャイミニーヤ派ナンブーディリ（バラモン）たちは写本によるほか、一部を口頭でも伝承している（筆者自身の取材による）。伝承の良好さにもかかわらず、このテキストが他のサンスクリット文献に引用されることは極めてまれで、ジャイミニーヤ派と、現在の隣接学派であるカウシータキ派の文献の中に限られている。*Jaiminiya-Śrautasūtra* に一度³⁰⁾、バヴァトラータの同書の注釈³¹⁾と *Kauśitaki-Brāhmaṇa* に対するウダヤの注釈に³²⁾それぞれ数度現われるだけである。*Kena-Upaniṣad* の部分を除いてヴェーダーンタの学匠たちに真正のウパニシャッドと認められなかったために、JUB はジャイミニーヤ派の伝統の奥にとどめられて、学派の壁を越えて広く流布するにはいたらなかった。19世紀の後半に A. C. Burnell が南インドでジャイミニーヤ派の写本を発見するまで、一般にはその存在すら知られていなかったことは³³⁾、学派と時代を越えて名声と評価を享受し続けてきた同種の文献 ChU と対照的である。

4. 以上、サーマ・ヴェーダ系ジャイミニーヤ派所属の最初期ウパニシャッド文献 *Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa* について、学派 (*sākhā*) の視点からその成立と伝承の過程を跡づけた。関連する他の文献に対しても同様の方法を適用し成果を集積することによって、ヴェーダ後期に全学派に広がったアーラニヤカ・ウパニシャッド文献成立の動きを、各学派の伝統と活動の歴史と、地理関係などによる学派間の文献的・思想的影響という

縦横の方向からたどることが可能となるであろう。さらには、後代の各ヴェーダ学派におけるウパニシャッドの伝承と、ウパニシャッドを学派の伝統から切り離して絶対視するヴェーダーンタ運動との関係についても同種の研究方法が有効であると予想されるが、それについては指摘するにとどめる。

注

- 1) 本稿はアメリカ・ハーヴァード大学で開かれた第一回国際ヴェーダ学ワークショップ（1989.6.11-14）での研究発表の前半部を日本語の論文にまとめなおしたものである。発表の後半部では写本伝承と原典批判の問題を扱った。
- 2) 彼は1981年以降 *Materialien zu den vedischen Schulen* という表題なし副題の論文を連続して発表している。最新のものに、Witzel 1987 がある。
- 3) 辻直四郎 1948 (1981), pp. 319ff. 参照。カウトゥマとラーナーヤニーヤは同系統の姉妹学派であるが、シャーティヤーヤナとジャイミニーヤは同一学派の時代による別称である可能性が高い。
- 4) Renou 1953, p. 140, n. 3. ただし、彼は両者の対応を最初の2章に限り、ChU 3-4 と JUB 3-4 の関係を見落としている。
- 5) ChU 1.2 < JUB 2.10-11 (cf. Fujii 1989, p. 1001f.); ChU 1.4 < JUB 1.18; ChU 2.13.1-2 < JUB 2.2.9-10; ChU 2.22.1 < JUB 1.51.3-52; ChU 2.23.4 < JUB 1.10.3; ChU 3.16 < JUB 4.2; ChU 4.3 < JUB 3.1-2 (cf. Lüders 1916); ChU 4.16-17 < JUB 3.15-17 (cf. 注14).
- 6) 本来の歌詞を *o vā o vā o vā hum bhā o vā* と単音の連続にかえて歌われる。歌詞を伴わないことから *aśarīra-gāyatra* 「肉体 (= 歌詞) のないガーヤトラ」と呼ばれる。詳しくは Howard 1983, pp. 315-325.
- 7) Fujii 1984. Cf. Deshpande 1980; Bodewitz 1986?; Howard 1987.
- 8) GobhGS 3.1.28; KhādGS 2.5.17; JGS 1.16.
- 9) Parpola 1968, pp. 69-74. カウトゥマ派のグリヒヤ・ストラの注釈書は、*aupaniṣada-vrata* に対して *upaniṣadbrāhmaṇa* (= ChU ?) を学ぶべきものとしてあげている (on GobhGS 3.1.28)。Parpola はこの説明を疑い、現在に伝わっていないサーマンがこのヴラタに配されていた可能性を論じている。いずれにしろ、このヴラタに *gāyatra* が結び付けられて

- いないことは確かである。
- 10) JUB 冒頭の *om* 論が *o vā o vā . . .* という *aśarīra-gāyatra* の実際の形の上に組み立てられているのに対して (Bodewitz 1986?; Fujii 1987), ChU の冒頭は *om* の重要性を一般的に論じている。
 - 11) JUB 1.3.2 < JB 2.420; JUB 1.3.4-5 < JB 1.136; JUB 1.8.8ff. < JB 1.322; JUB 1.10.3,4 < JB 2.10; JUB 1.11.1 < JB 1.88; JUB 1.18.1-7 < JB 1.283; JUB 1.20.3 < JB 1.144.
 - 12) JB 1.1-65 と JUB 第三章との前後関係は未確定。Bodewitz は JUB を後に見ている (1973, p. 11)。Cf. also Fujii 1987, p. 1003f.
 - 13) Fujii 1989, pp. 1001-1000.
 - 14) [Aitareya-Brāhmaṇa (=AB) との関係] JUB 1.50-58 (天と地, *sāman* と *ṛc* の結婚) は AB 3.23 をたぶん AV 14.2.71 をもとに拡張したもの。JUB 3.4.4 は AB 6.15.5 に基づいている。JUB 3.15-17 (プラマン祭官の職務) の parallel passages は AB 5.32-34; KB 6.10-12; JB 1.357-358, ŚB 11.5.8; SB 1.5.1-9; ChU 4.16-17; GB 1.2.24-1.3.5 に見られるが, AB がすべてのもとなっている (AB 5.32.1-33.1 > JB-ŚB-KB; AB 5.33.2-34.4 > JUB-ŚB-ChU-GB)。[Aitareya-Āraṇyaka (=AĀ) との関係] JUB 1.9.5-10.1 (神聖な形容辞の列挙) は AĀ 5.3.2 に一致。JUB 3.3.6-13 (インドラの聖仙への教授) は AĀ 2.2.3 に parallel である (cf. AB 6.20; ŚāṅkhĀ 1.6)。
 - 15) カウシータキ派との関係は, ŚāṅkhĀ 1.5; ŚāṅkhŚS 17.15.10-12 とほぼ同一のマントラを載せる JUB 3.4.5 に初めて認められる (cf. Fujii 1989, p. 999f.)。後代の KauśU 1.2 ff. は, カウシータキ派が再生説に関してジャイミニーヤ派の影響を受けていたことを示している。
 - 16) Cf. プラーナ説 3.1-2 < 1.60-2.12 (Fujii 1989, pp. 1002-999), 天界上昇説 3.11-14 < 1.1-7 (次注参照), *aśarīra-gāyatra* 3.29-31; 3.38-42 < 1.15-16 (Fujii 1984, p. 1123-22).
 - 17) Cf. esp. JUB 3.14.1-6=JB 1.18: 9,19-26. JUB 第三章では JB 1.1-65 に共通する死と再生が中心テーマになっているので, もともと JUB 第一章で一種の祭式シンボリズムとして説かれていたサーマンによる天界への上昇 (1.1-7) も, 第三章では死後の再生の形 (3.11-14) に作りかえられている (Fujii 1987)。
 - 18) 注4) 5) 参照。
 - 19) Thieme (1988) は, 日常生活の心得や家庭儀式などを説く BĀU の最後の2章 (*Khila-kāṇḍa*) は本来, 白ヤジュル・ヴェーダ全体の補遺として

独立のテキストであったという。JUB 4.22-28 も内容上 JUB の本体（1.1-4.17）との関係が薄いので、もともと独立の補遺文献であったものが、後の伝承の過程で Kena-Upaniṣad とともに JUB に統合されたのかかもしれない。

- 20) Witzel 1987, pp. 185-193.
- 21) 同様に、ヤジュル・ヴェーダ系ヴァージャサナーイン派との間でも、JUB 第三章以降、地理的な関係に変動があったことが想像される。Cf. 説明文 2).
- 22) Max Müller 1879, pp. lxxxixff.; cf. Parpola 1973, p. 7.
- 23) Deussen はシャンカラの記述と Burnell が報告する JB 写本の内容との一致を指摘している (1897, p. 61f.)。
- 24) Parpola 1968, p. 48; cf. Raja 1973, p. 316.
- 25) on Brahmasūtra 3.3.25. 注釈文は、シャーティヤーカナ派の JUB 4.1 以下は *vidyā* に関する部分 (すなわちウパニシャッド) の近くに位置するが、*vidyā* とは無関係であるというもの。ジャイミニーヤ派をシャーティヤーカナ派から派生した別学派とみる Witzel は、JUB の Kena-Upaniṣad 以下をジャイミニーヤ派の付加と考えるために、*vidyā* に関する部分をその前の JUB 4.11-17 と解釈している (1977, p. 145)。しかし 4.11-17 の内容 (cf. Fujii 1984, p. 1122) からも、また Kena-Upaniṣad を含まない *Śātyāyana-Upaniṣad-Brāhmaṇa なるものが確認されていないことからも、*vidyā* の部分として Kena-Upaniṣad が意図されていると考えるべきである。
- 26) on JSS 1.11: Shastri 41, 16. *gāyatropaniṣad* という名称は JUB 4.1-17 の次の末文に由来する : *saiṣā śātyāyanī gāyatrasyopaniṣad evam upāstavyā* 4.17.2.
- 27) ジャイミニーヤ派の歴史については、Parpola 1984, pp. 18-21.
- 28) 例えばヤジュル・ヴェーダ系のカタ派では、*śukriya-vrata* はアーラニヤカ、*aupaniṣada-vrata* はウパニシャッドの學習に対するものである (Witzel 1977, pp. 140-141, 152-153)。Cf. also Kane 1974, pp. 370-373.
- 29) E.g. JUB 3.38f. (cf. Fujii 1984). この事実はバヴァトランタによつても証言されている (on JSS: Shastri 145, 29-30; cf. Fujii 1986, p. 14)。
- 30) JSS 1.11: Gaastra 13, 5-6 = JUB 1.22.6. Cf. Fujii 1986, p. 9f.
- 31) JUB 1.21.9 on JSS 1.11: Shastri 41, 25; JUB 1.22.3 on JSS 1.11: 40, 24-25; JUB 1.22.6 on JSS 1.11: 40, 23; JUB 1.24.3 on JSS 1.11: 41, 17-19; JUB 1.54.3 on JSS 1.7: 30, 18-20; JUB 2.6.12 on JSS

- 1, 24: 89, 7; JUB 2.7.1 on JSS 1.1: 4, 7; JUB 2.8.2 on JSS 1.1: 9, 24–25; JUB 3.16.1–2 on JSS 1.23: 84, 14; JUB 3.21.2 on JSS 1.3: 15, 21; JUB 3.38.10 on JSS 1.4: 21, 24–22, 1; JUB 4.25.3 on JSS Paryadhyāya: 341, 11. 同定のほとんどは A. Parpola 博士が準備された *Jaiminiya-Śrautasūtra* の校訂版（未出版）に負うている。
- 32) Sarma 1976, p. 699 参照。
- 33) Burnell 以前の状況と彼の業績については, Parpola 1973, p. 6f.

参考文献

- Bodewitz, H. W. 1973: *Jaiminiya Brāhmaṇa I, 1–65. Translation and Commentary with a Study: Agnihotra and Prāṇagnihotra*. Leiden: E. J. Brill.
- . 1986?: “Reaching immortality according to the first anuvāka of the Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa.” In *Dr. B. R. Sharma Felicitation Volume*. Tirupati, 32–42.
- Deshpande, I. C. 1980: “Concept of the Gāyatra-sāman in the Jaiminiya-Āranyaka.” In *CASS Studies, Number 5*. Pune, 49–60.
- Deussen, Paul. 1897: *Sechzig Upanishad's des Veda aus dem Sanskrit übersetzt und mit Einleitungen und Anmerkungen versehen*. Leipzig.
- Fujii, Masato. 1984: “On the unexpressed gāyatra-sāman in the Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa.” 『印度学仏教学研究』第32卷第2号, 1123–1121 (1–3).
- . 1986: “The *Bahiṣpavamāna* Ritual of the Jaiminiyas.” 『待兼山論叢』第20号哲学篇, 3–25.
- . 1987: “The Gāyatra and Ascension to Heaven (Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 1, 1–7; 3, 11–14).” 『印度学仏教学研究』第35卷第2号, 1005–1002 (16–19).
- . 1989: “Three Notes on the Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 3, 1–5.” 『印度学仏教学研究』第37卷第2号, 1002–994 (23–31).
- Howard, Wayne. 1983: “The Music of Nambudiri Unexpressed Chant (*Aniruktagāna*).” In *Agni: The Vedic Ritual of the Fire Altar*. Vol. II. Ed. F. Staal. Berkeley: Asian Humanities Press, 311–342.
- . 1987: “The Body of the Bodiless Gāyatra.” *Indo-Iranian Journal*, 30, 161–173.
- Kane, P. V. 1974: *History of Dharmasāstra*. Vol. II, Part I. 2nd ed.

- Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Lüders, H. 1916 (1940) : "Zu den Upaniṣad, I. Die Saṃvargavidyā." (= Lüders, *Philologica Indica*, Göttingen 1940, 361–390).
- Max Müller, F. 1879 : *The Upanishads*. Part I. The Sacred Books of the East Series, Vol. 1. Oxford; rpt. Delhi : Motilal Banarsiādass, 1965.
- Parpola, Asko. 1968 : *The Śrautasūtras of Lāṭyāyana and Drāhyāyana and Their Commentaries. An English Translation and Study*. Vol. I : 1. Helsinki : Societas Scientiarum Fennica.
- . 1973 : *The Literature and Study of the Jaiminiya Sāmaveda in Retrospect and Prospect*. Studia Orientalia 43 : 6. Helsinki.
- . 1984 : "On the Jaiminiya and Vādhūla Traditions of South India and the Pāṇḍu/Pāṇḍava Problem." *Studia Orientalia*, 55 : 22, 429–468.
- Raja, K. Kunjunni. 1973 : *New Catalogus Catalogorum. An Alphabetical Register of Sanskrit and Allied Works and Authors*. Vol. 7. Madras : University of Madras.
- Renou, Louis. 1953 : "Le Passage des Brāhmaṇa aux Upaniṣad." *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 73, 138–144.
- Sarma, E. R. Sreekrishna, ed. 1976 : *Kauśītakibrāhmaṇa*. 3. *Vyākhyā of Udaya*. Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 9,3. Wiesbaden.
- Thieme, Paul. 1988 : "On the Khilakāṇḍa of the Śatapathabrahmaṇa." 第4回京都賞受賞記念ワークショッピング記念講演。
- 辻直四郎 1948 (1981) : 「現存 Sāmaveda 文献の概観」 (=『辻直四郎著作集』第一巻, 法藏館, 1981, 317–344)
- Witzel, Michael. 1977 : "An Unknown Upaniṣad of the Kṛṣṇa Yajurveda : The Kaṭha-Śikṣā-Upaniṣad." *Journal of the Nepal Research Centre*, Vol. 1 (Humanities), 139–153.
- . 1987 : "On the Localisation of Vedic Texts and Schools (Materials on Vedic Śākhas, 7)." In *India and the Ancient World: History, Trade and Culture before A.D.650*. Ed. Gilbert Pollet. *Orientalia Lovaniensia Analecta*, 25. Leuven, 173–213.

(文学部助手)